

報道関係者 各位

2024. 2. 8
< 配信枚数2枚 >**立岩真也 立命館大学生存学研究所・前所長の遺志を未来に
「障老病異アーカイブズ・プロジェクト」を推進するクラウドファンディングを実施**

立命館大学生存学研究所(京都府京都市、所長:大谷いづみ)は、2023年7月末に急逝した立岩真也前所長・先端総合学術研究科教授の遺志を継ぎ、障害や病気に関する社会運動や政策に関する貴重な記録を集め、保存し、公開することを目的とする「障老病異アーカイブズ・プロジェクト」を推進するためのクラウドファンディングを、2024年3月26日まで実施します。

立命館大学生存学研究所(2007年設立)は、人間は誰も「障老病異」(障害、老い、病気、そして性的アイデンティティなどの異なること)とともに生きているということを基軸に、生存をめぐる課題を研究・交信し「生存学」を構想・提言・実践するグローバル拠点を目指しています。

立岩前所長は、生存学研究所の初代所長であり、日本における障害学を確立した先導者の一人で、常に障害や病のあるひとたちと対話し、情報を共有し、研究を蓄積してきました。同時に、散逸・消失の危機にある患者運動・障害者運動などの資料、医療や福祉の政策や実践に関わる資料などを救出する活動も行い、収集したデータを公開するウェブサイト「arsvi.com」を運営してきました。ここ数年は、収集したデータの公開や整理が必要となり、その額が大きくなっており、立岩前所長が2023年7月末に急逝されたことに伴い、運転資金が不足しています。



「障老病異アーカイブズ・プロジェクト」は、ウェブサイトの運営を継続させ、貴重な紙資料を継続して収集、整理し保存する環境を整えていくことを目指しています。

このプロジェクトに参加することで、障害や疾病に関する社会運動の経験や関連する政策の変遷についての理解を深めることができます。さらに、社会の中でマイノリティとして生きざるを得なかった人々の歴史を後世に継承し、その尊厳を守るという立岩前所長の姿勢を未来に受け継ぎたいと考えています。

【クラウドファンディング概要】

寄付募集終了日: 2024年3月26日(火)11:00まで
目標金額:500万円(第一目標金額の300万円は達成済み)
URL:<https://readyfor.jp/projects/arsvi2007>

**本リリースの配布先: 京都大学記者クラブ****●取材・内容についてのお問い合わせ先**

立命館大学広報課 担当:岡本

TEL.075-813-8300 Email. r-koho@st.ritsumei.ac.jp

立命館大学生存学研究所について (URL:<https://www.ritsumeai-arsvi.org/>)

立命館大学生存学研究所は、2007年度文部科学省グローバル COE プログラム「生存学」創成拠点の採択を受け、設立されました(前身の生存学研究センターは 2018 年度まで)。「生存学」創成拠点では、5 年間のプログラムとして、大学院先端総合学術研究科と人間科学研究所が基幹となり、教員・院生・研究員が組織を超えて連携し、研究・教育活動を展開してまいりました。

生存学研究所は、こうした実績を踏まえて「生存学」を構想・提言・実践しつつ、さらなる展開を行う国内の中核的研究拠点です。また、海外研究者との連携を強め、グローバルなハブ機能をもった拠点として国内外での「生存学」の発信を目指しています。

【主な活動内容】

- 「障老病異」を基軸とし、4つの学問的課題群としてさらなる飛躍を目指しています。具体的には、①生存の現代史、②生存のエスノグラフィー、③生存をめぐる制度・政策、④生存をめぐる科学・技術、です。この4つの課題群を交差させつつ展開し、研究会、ワークショップ、国際共同研究会等を開催しています。
- 研究成果を様々なメディアを通じて発信しています。紀要『立命館生存学研究』、電子ジャーナル Ars Vivendi Journal の発行、研究成果のウェブサイト、SNS、メールマガジンによる多言語発信などを行っています。
- 患者会・障害者団体発行の機関誌など、当事者の活動に関する資料のアーカイビングを行い、その蓄積を研究所の活動に反映させます。
- アーカイブを生かしつつ、障害や病をもつなどの当事者が参加する研究交流・社会連携活動を実施しています。
- 大学院生、ポストドクトラルフェロー(PD)など若手研究者が運営するプロジェクトとの連携した研究活動・社会活動を推進しています。
- 生存学関連分野の先端領域において、国内外の研究者や患者会・NPO 等との共同研究、競争的資金の獲得、官民からの研究調査受託等を推進し、社会的提言と実践を目指しています。

生存学とは？

私たち人間はみな「障老病異」とともに生きています。障害、老い、病気、そして、たとえば性的なアイデンティティの面で人と異なることなどは誰の身にも起こり得ることです。それにもかかわらず、これまではその当事者の側に立って調べたり考えたり、その情報を蓄積したりということがあまり行なわれてきませんでした。

医療やリハビリテーションは、基本的に病気や障害を「治す」ための学問です。そうすると、「治らない状態」はその学問の枠から外されていきます。では、そうした人のために社会福祉学があるではないかと言われるでしょうか。けれども、福祉サービスを受ける時間以外の時間にもその人は生きています。その人たちがどうやって生きてきたか、生きているかを知る、そしてこれからどうして生きていくか考える。それが「生存学」です。